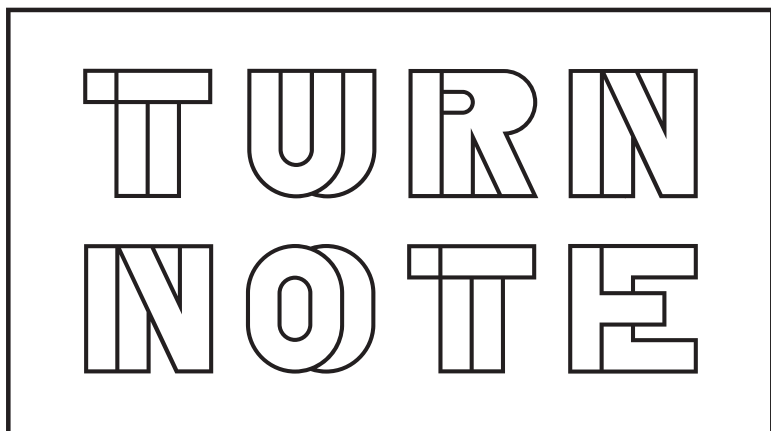




TURN をめぐる言葉
2020



文化でつながる。未来とつながる。

TokyoTokyo
FESTIVAL

TURN NOTE

TURNをめぐる言葉
2020

本書について

1年の活動を通して生まれた言葉を収録した『TURN NOTE』。2020年のTURNは、新型コロナウイルス感染症の影響により、プログラムの中止や実施方法を検討し、オンライン企画を取り入れたり、変化する社会に応答したTURNジャーナルを発行したりするなど、これまで着手してこなかった活動やアプローチを始動した。本書には、そうした新しいプログラム特性やメディアから生まれた言葉、また想定していなかった社会の変化を契機に生まれた言葉が加わっている。

TURN NOTE は、発せられた時の言葉をできるだけその時のままの形で掲載することによって、それぞれのシーンにおける発言者の「その人らしさ」や空気感が感じ取れるよう試みている。

それぞれ柔らかい言葉もあれば、固い言葉もある。5年後、10年後に本書を手にとった時、それらはどのように感じるのだろうか。その柔らかさから固さへのグラデーションは、読み手の心象と、これから置かれる環境や活動の仕方によって、変わっていくのかもしれない。

折りに触れて、本書を手にとっていただきながら、多様性のある社会について考える一助となれば幸いである。

本書は、「TURN」における以下の資料(2020年1月-12月)をもとに作成しています。

2020年12月31日現在の情報に基づきます。

文字起こしデータ

- TURNミーティング

TURNを共有し、意見交換する開かれた場。第10回は東京藝術大学にて、第11回と第12回はオンライン配信で開催

- TURNラボ研究会

TURNラボで行っているリサーチやキーワードを議論する場。オンラインで実施

- TURN LAND

TURNを日常的に実践する場を目指し、福祉施設や団体がアーティストとともに企画する参加型のプログラム。2020年度は、オンライン企画も開催

- TURNサポーター勉強会

TURNサポーターを対象に、アクセシビリティの知見やプロジェクトをサポートするための技術などを学ぶ場として、オンラインで開催

成果物

- TURN ジャーナル(TURN JOURNAL)

TURNの取組とその意義をさまざまな角度から発信する定期行物。2020年度は、日々変化する社会に応答することを視野に、タブロイド仕様で年4回発行

- 『TURN on the EARTH わたしは ちきゅうの こだま』

展覧会「TURN on the EARTH ～わたしはちきゅうのこだま～」の開催にあわせ、海外でのTURNの活動をまとめた書籍

その他

- TURNのドキュメンタリー映画制作に向けた田村大(らくだスタジオ)によるインタビュー

- TURN関係者とのメールや打ち合わせを記録したメモ

- TURN公式ウェブサイトに公開されていないレポート など

TURN NOTE

人々のセンスを再建していく

コロナ終息後は何もなかったかのように社会は回るでしょうが、ステイホームや新しい生活様式が求められる今、いかに楽しく幸せに過ごすか、を考え実践しようとする人が平時以上に出てきているとすれば(そうでない深刻な状況の人もたくさんいるという問題はここでは棚上げします)、それは新型コロナウイルスがなくてもどちらにしてもつまらなかったかもしれない人生(生活＝生き方＝働き方)を改革するための人々のセンスを再建していく(感性／人間性を取り戻す)チャンスになると考えています。

西尾美也(美術家)

『TURN JOURNAL SUMMER 2020 – ISSUE 04』より(2020年5月29日)

何をいまさら

思えば、たけしや私はコロナ禍以前から、社会からそれなりに距離を置かれていた。つまり無意識のソーシャル・ディスタンスを強いられてきたといえる。その距離を埋めたくて、私は20年間も活動してきたのだと思う。だからこの言葉を聞いた時に「何をいまさら」という思いはどこかにあったし、あえて距離を取りたくもないと思った。

久保田翠(認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ代表理事)

『TURN JOURNAL AUTUMN 2020 – ISSUE 05』より(2020年9月26日)

「多様性」って、よく耳にしますけど

招かざるお客さんって、結構多いけれど、その人たちともどうやって出会っていくか、出会い直していくのかっていうことが必要なんですね。

「多様性」って、よく耳にしますけど、自分にとって居心地のいい人だけと一緒にいることは多様性ではないし…。多様性って、やっぱ覚悟いりますよ。

上田假奈代(詩人/NPO法人こえとことばとこころの部屋 cocoroom 代表)
第10回 TURN ミーティングより(2020年2月2日)

いろんな種の行き先がある

「種」って、発芽だけが種の生きる道ではない。種は、絞ると油になったり、家畜の餌になったり。全ての種が発芽する訳ではない中で、発芽しなくても、いろんな生き方がある。いろんな種の行き先がある。

トミザワタクヤ(Tokyo Cotton Village 代表)
TURN LAND クラフト工房 La Mano「テレ手のプロジェクト」より(2020年6月28日)

暗闇がなかったら

洞窟壁画は人間が暗闇からイメージを獲得した証であり、暗闇がなかったらイメージから具現化する能力を人間は獲得できなかったのではないかと私は考えている。

身を守るために籠る場所であった洞窟。いわゆるコロナ禍においては、地球上のそれぞれの家が洞窟になっているのではないだろうか……。そしてそこからあらたなイメージが生まれて、その文化を基盤に次の新しい社会が生まれてくるのではないだろうか……。

日比野克彦 (TURN 監修者)

『TURN on the EARTH わたしはちきゅうのこだま』より (2020年7月1日)

体は社会から切り離せない

体は社会から切り離せないものであり、この世界規模の体験のストレスはごまかすことなく、可能である限り素直に痛みとして受け止めることが大切だと思っています。

(中略)

それぞれが負った痛みの修復に、これからどのくらいかかるかはそれぞれでわかりませんが、個人個人の意識や生き方の修復が大切になっていくように思っています。人は個人から始まり、便宜的にも有効な集団を生んできました。修復の作業は人を強靱にすることができると思っています。

僕らの踊りも、それぞれの負った痛みからどんな踊りが生まれるのか、それは社会に属する体として大事な瞬間だと感じます。

アオキ裕キ (ダンサー / 振付家)

『TURN JOURNAL SUMMER 2020 – ISSUE 04』より (2020年5月27日)

盲ろう者にとって「ある」ということ

「触れないもの」や「体験しないこと」は、盲ろう者にとっては無いものという状態になってしまいます。逆に「触れるもの」や「体験できること」は、言葉とイメージが重なって理解していくということになります。ですから、実際に無いことは、盲ろう者にとっては本当に無い。実在しないということになります。おとぎ話のような話があったとしても、そのことは全部実際にあることというふうに認識してしまうんです。

森敦史（筑波技術大学総務課広報・情報化推進係）
第11回TURN ミーティングより（2020年9月19日）

本を共有できる豊かさ

盲の人が、図書館に行ったり、本を手にとったりすることは少ないかもしれません。普段はデータからの読み上げ機能で本を読んでいます。私の家には意外と本があるのですが、そうした本は戯曲とかが多くて、好きな演劇を見に行った後に買いました。本そのものから新しく出会う、という経験はあまりないです。

でも、本に触った時に、大きさが変わっていたり、表紙が特徴的だったりすると、何かメッセージがあるのではないかなと思って、誰かにどういう本なのか聞きたくなります。あとは、本に触っている途中に何かしら変化があると、何かメッセージがあるんじゃないかと感じます。

触りながら語れる変化があると、本の楽しみ方が広がります。

関場理生（ダイアログ・イン・ザ・ダーク アテンド）
『TURN NOTE 2020』の制作に向けたヒアリングより（2020年11月18日）

自分と向き合う時間を与えられている

世の中の状況は、日々、騒々しくもありますが、ラmanoではさまざまな桜が咲き始め、穏やかな時を刻んでおります。

とはいえ、今週から利用者の方も自宅での作業へと切り替わり、本日は1名の利用者さんでした。4月に入り、ボランティアさんの活動も自粛となり、つながりを大事にするラmanoに「人がいない」という状況です。

そんな中で、日比野さんのメッセージに勇気づけられました。

こんな時だからこそ、自分たちは、何を考え何をしなければならないのか。

現代の時の流れる速さの中、さまざまな自粛という時間の中、自分と向き合う時間を与えられているような気がしてなりません。

人が生きるということと、命の重さは同じであること。

この困難から得られる未来を、TURNで共有したいと願います。

高野賢二(クラフト工房 La Mano 施設長)

TURN フェス 2020 の中止案内への返信より(2020年4月8日)

無自覚に距離を置くこと

コロナで気づいた他者との距離の大切さ。近づきたくても制限せざるを得ない心苦しさと同時に、わたし達の心にある、無自覚な距離を置こうという「差別」意識の存在を自覚することは重要だ。それにより、無自覚に距離を置くことで生まれる他者との軋轢を解消する一歩を踏み出せるに違いない。

上野吉一(名古屋市東山動植物園企画官)

『TURN JOURNAL AUTUMN 2020 - ISSUE 05』より(2020年8月25日)

一番の障害

健常者の人が、障害のある人に期待する表現って、自分たちと違う表現なんですよ。でも意外と障害のある人は、みんなが話題にしているようなものに憧れを持っていたり、つくってみたいと思っていたり、個性的であることを必ずしも一番に思っていないところがある。でも、「障害のある人と何かをつくっています」って言うと、周りは必然的にこれまで自分たちが見たことのないものを見られるはずだということを期待する。それが一番の障害だなと私は思っています。

田中みゆき(キュレーター/プロデューサー)
第1回TURNラボ研究会より(2020年7月27日)

「いい」を伝えていく

「いい」って思ったものは、「いい」って伝えていかないと、大切なものって残っていかないんですよ。それってモノだけでなく、文化含め、結構何にでも言えることだなんて思っています。お客さんの一番近くで活動するのってサポーターの皆さんだと思うので、「いいな。面白いな」って思ったことを自身の言葉で伝えていくことで、TURNの活動がもっと豊かで楽しいものになっていくんだろうなと思います。

大政愛(はじまりの美術館学芸員)
第3回TURNサポーター勉強会より(2020年10月26日)

見えないダンスを発見したい

オンラインのダンスの授業で、一人だけ画面をずーっとオフにしていた学生がいた。その人は、自己紹介さえできない対人恐怖症の学生だった。しかし、終わった後のリフレクションペーパーには部屋で一人取り組んだダンスのフィードバックが事細かに書かれていた。

その次の回ではそれがわかっていると、オフになった場面にドキドキした。オフになった画面の向こう側に見えないダンスがある。こちらには見えないけれど、向こうで一生懸命踊ってくれていると思えた。時にそういうダンスがあってもいい。僕は見えないダンスをもっともっと発見していきたい。

砂連尾理(ダンサー / 振付家)

第2回TURNサポーター勉強会より(2020年9月12日)

自分とは違う生活環境への想像力

動物であるヒトのサガとして、不安や恐怖に対して自分たちの安全を守ろうという、ある意味自然でもある行動が強化されるあまり、「私たち」の範囲が限定され、それ以外に対して向ける眼差しが厳しく監視的になってしまうかもしれない。まるで自分たちを脅かす敵だと認識しているかのように。

自分とは違う生活環境への想像力を持たなければ、あっという間に自分の目に映る世界だけが社会だと思えてしまう状況でもある。

小澤いぶき(児童精神科医)

『TURN JOURNAL AUTUMN 2020 - ISSUE 05』より(2020年9月8日)

学びの方に力を入れる

「ダメ」とか否定的な言葉が多くなってしまいがちなんです。「触っちゃダメ」とか、「近づいちゃダメ」、「マスクを外しちゃダメ」とか。ダメダメダメって否定されると、人ってすごく嫌ですよ。なので、そうじゃないようにする試みをしています。学びの方に力を入れる。インターネットで手洗いやマスクの付け方の動画を見てみたり、手でタッチができない代わりにグットのハンドサインや肘タッチを取り入れたり。ここだったらアクリル板があるからマスクを外して喋っていいですよ、と場所を決めたりしています。

高田紀子(板橋区立小茂根福祉園職員)

田村大(らくだスタジオ)によるインタビューより(2020年7月7日)

感覚のチャンネルが少し変わっていく

糸に触れている時間は、ちょっと別の次元に行くような感覚になる。ちょっと内面的な旅をしているような、何か意識してなかったことをポロツと思ひ出したり。世界との距離感っていうか、感覚のチャンネルが少し変わっていくような、そういうスイッチを入れてくれるような力が、糸だったり、それを触れる手とかの関係の中にあるんじゃないかな。

五十嵐靖晃(アーティスト)

TURN LAND クラフト工房 La Mano「テレ手のプロジェクト」より(2020年11月8日)

遠く離れてでも会話できる

今思い出したんですけど、手話の先生にお誘いを受けて、ろう者のグループと遊びに行ったんです。ついて行ったら、ディスコだったんです。聞こえない人たちがディスコに行くってことにびっくりして。でも便利だなと思ったのは、ディスコってすごいうるさいじゃないですか。聞こえる人同士だと「え?」となってしまうのが、ろうの人とは関係なくて、もし遠く離れていても手話で会話できる。

高島由美子(手話通訳士)

第12回 TURN ミーティングより(2020年11月29日)

手をギューツと握る

例えば盲ろうの方が話している時に、周りの状況などから「ちょっと黙ってほしいな」って伝えたい時。多分、「黙ってください」とは言わないで、手をギューツと握る。そうすると、フツと向こうも言葉飲み込むってようなシチュエーションも起こっているなあと思うと、指点字って、点字のタイプライターを打つように音を相手に伝えてはいるけれど、それ以上のものが人と人とのかわりの中で生み出されていくところが大きいんだらうなって改めて感じました。

三科聡子(宮城教育大学教育学部准教授)

第3回 TURN ラボ研究会より(2020年9月28日)

新しい家具という新参者

新しい家具という新参者が、これまでの部屋の秩序を古い家具の放棄や部屋の配置換えという形で崩し、その結果、心地よさが奪われてしまった。

磯野真穂(人類学者)

『TURN JOURNAL SUMMER 2020 – ISSUE 04』より(2020年6月11日)

想像力っていう深層筋

「想像力」っていう力を司る身体の器官があるとしたら、どんなだろうって話もしたけど、僕は信じていて、想像力はきっと見えな
いものに触れようとしたり、わからない世界に手を伸ばそうとする
時に、身体の深いところで働くインナーマッスル(深層筋)のような
存在としてどこかにあると思う。

大西健太郎(ダンサー / パフォーマー)

田村大(らくだスタジオ)によるインタビューより(2020年9月1日)

手話でも自分らしく

違っていいということですよ、それぞれ違うから。那須さんは那須さん、モンキー高野はモンキー高野。自分らしく、手話でも自分らしく表現しているかなと思います。

それぞれみんな違いがあって、刺激をし合って、それぞれ尊重しながらやっていくのがいいのかな。歌とかもそうなんじゃないかな、というふうに思います。全く同じ歌い方ではなくて、それぞれの歌唱力というものが違うというのと、同じではないかなと。

モンキー高野(手話フレンズ代表)

第12回 TURN ミーティングより(2020年11月29日)

逃げ続けて今の僕がいる

物事から逃げ続けて今の僕があると思います。嫌なことから逃げています。それは、そのところに行ったら怖いって思うから。例えば、あの会社に入ってしまったら、僕はお金を稼ぐためになんでもやってしまう人間になってしまうんじゃないかという妄想が生まれる。働いたことがないんですよ、ちゃんと会社で。っていうのは、僕の性格上、やるってなったら、その場所に従ってやりたくなるから。特に先輩とかね、親みたいの人に言われると従ってしまう。だからそういうところに行かないように、できるだけひっそりひっそり、あっちから逃げよう、こっちから逃げようって、逃げ続けた結果、今こうやってやっている自分がいる。

ユキハシトモヒコ(旅する服屋さんメイドイン主宰)

TURN LAND 気まぐれ八百屋だんだん「おとな図鑑番外編」より(2020年8月13日)

違いを超えることが大変な時

「違う」ということが、すごくマイナスに働く世の中になっちゃってるなと思っていて。何かにしろ、若者と高齢者とか、外国の人と日本人とか、コロナにかかりやすい、かかりにくいとか。カテゴリーを分けて、こっちは間違っているというふうにしておかないとみんなが落ち着かない世の中になっちゃった時、「これからTURNは大変だぞ」と。違いを超えて、という言葉は綺麗なんですけど、すごく違いを超えることが大変な時に、言葉だけじゃとても足りないという感じになっちゃうのかなと。そういった時にTURNは、自分も含め、何をすべきなのかと考えています。

田村大(らくだスタジオ 映像演出家/脚本家)

アーティストへのインタビューでの対話より(2020年7月25日)

「社会」と「距離」をめぐる状況の反転

われわれは「社会的」であるためにこそ「交流」を控え、人と人との間に「距離」を保ちましょう、と言われている。現状で「社交」の場に参加し、活発な会話を交わすものは「反社会的」と見なされる。これは新型コロナの出現以前には全く考えられなかった事態である。「社会」と「距離」をめぐる状況は全く反転してしまったかのようだ。

百木 漠(立命館大学専門研究員)

『TURN JOURNAL AUTUMN 2020 – ISSUE 05』より(2020年9月8日)

ホコリのかぶった古い「生活様式」

ポストコロナの世界という、何か新しいことが起こる予感がしますが、それは、私たち「を」変えてくれる何かでは全くありません。私たち「が」この全自動差別産出機を分解して、その構造を解明し、正反対の仕組みを作り出すのでなければ、端的に言ってつまらないし、ホコリのかぶった古い「生活様式」に戻るだけです。いうまでもなく、そこにはどんな新しい文化も生まれません。

藤原辰史(歴史学者)

『TURN JOURNAL SUMMER 2020 - ISSUE 04』より(2020年6月24日)

ほんとそれぞれかな

意外だったのは、コロナ禍でも、あんまり困らない人がいたこと。つまり、もともと彼らは単独で行動していて、ハーモニーに来る前は、図書館で一人で過ごしていたり、家で一人でもっていたりしていた人たち。そうした人が、案外多いんですけれども、彼らにとっては通所のプレッシャーというのものがあって、僕らが「いつ来てもいつ帰ってもいいよ」と言っている、やっぱどこかで決まった時間に行って帰ってこなきゃ、という染み付いたものがある。それが解放されたことで、嬉々として毎日絵を送ってきつてくれたりとか、電話かけてくれたりとか、案外楽しんでいるような部分もありました。ほんとそれぞれかな、という感じがします。

新澤克憲(ハーモニー施設長)

田村大(らくだスタジオ)によるインタビューより(2020年6月27日)

三密を大切に守る

人と人との繋がりを大切する場合は、いわゆる三密を避けるという場と全く相反していて。人と人とが触れ合う、スキンシップする、親しく言葉を交わす、表情豊かに皆さんとお付き合いする、というのが大事なコンセプトなので、それと全く逆の指示が出た時は、本当にどうするのかなって大変思いました。けれどもやっぱり、ここでは特に高齢者の方の日常を支えるという意味でも、私たちの運営をストップすると、かえってデメリットになり、マイナス面が大きいので、あえて三密を大切に守りながらも、1日も休まずに運営してきました。

大井妙子(認定NPO法人ももの会 理事長)

田村大(らくだスタジオ)によるインタビューより(2020年8月4日)

エンターテインする側だけに なってしまった感じ

本当の意味で交流できているのか、という不安はあった。本当に心が通っているのか、わからなかったというか。直接会っていると、こっちからのアクションと、相手からのリアクションがほぼ同時進行だけれど、画面越しだと「行って帰ってくる」感じ。一応双方向ではあるのだけれど、同時性とかスピード感がそこにはなくて。オンラインだと、ある種の作業感が出てしまった。一緒に何かを楽しむというより、楽しませる側になってしまう。

今までは、家から出て「さくらんぼ」に行くその行為も含めた体験だった。刺激を受けることや発見がたくさんあって、体験として非日常感があったけれど、オンラインでの交流にはそれが無い。同じ場にいると関係性もフラットになって、みんなの中に溶け込みに行っているという感じがあったのかな。それが心地よいというか。エンターテイナーとしての自分が、皆と一緒に過ごす、ここが面白いなとか気づいたりするこれまでとは違う自分もいた。でもオンラインの交流では、エンターテインする側だけになってしまった感じ。

マチーデフ(ラッパー)

TURN 交流プログラムの打ち合わせより(2020年10月24日)

「ザツゼン」と「整然」

「ザツゼン」ということが、私たちの中ではとても重要なんですけども、ザツゼンは「整然」の逆です。

整然っていうのは、「きちんとした」、「立派な」、「スタンダード」、「かくあるべし」、「規範」、「大人ならこうしなくちゃいけない」といったこと。養護学校とか障害のある人の施設でも、良かれと思ってそういうことを教え込む訳です。でも、ザツゼンから広がっていくのは、逸脱していく面白さだったり、価値観が拡張することだったり、これもアリなんじゃないっていう発見だったり。そんな今までになかった可能性が、ザツゼンから生まれてくるんじゃないかなと思っています。

鈴木励滋(生活介護事業所「カブカブ」所長 / 演劇ライター)
第10回 TURN ミーティングより(2020年2月2日)

「準備」用のノート置いて出かける

自分が「集合時間」だと思っていた時間に人は集まらなかった。こちらが話しをしている時に「あってほしい」状態で相手は聞いていなかった。どんどん話しが「脇みちにそれていく」ことがあった。彼らとの関わりに苛立っている自分を、煩わしく感じ始めるもう一人の私が現われてきた。気がつくのある朝、いつも離さなかった「準備」用のノートを部屋に置いて出かけていた。

大西健太郎(ダンサー / パフォーマー)
『TURN on the EARTH わたしはちぎゅうのこだま』より(2020年6月11日)

“わたし”は、一人ぼっちじゃない

私の周りに起きた一番大きな変化は、オンライン化という観劇スタイルの変化であったが、以前と同じように手話もなく文字もなく、私はただあてもなく漂うのみであった。

今やマスクは必須になり、フィジカルディスタンスを求められるようになったが、その物理的距離をさまざまな技術や工夫で超えていこうとしている。

(中略)

そしてまた手話も、物理的距離を乗り越える手段の一つとして普及していくだろう、と予想している。2m離れても、間に仕切りがあってもそれが透明なガラスなどであれば、手話なら難なく話せる。「新しい生活様式」の中で漂う“わたし”は、一人ぼっちじゃない。

石川絵理 (NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク事務局長)

『TURN JOURNAL SUMMER 2020 – ISSUE 04』より(2020年6月3日)

自由さも不自由さも

便利さも不便さも、自由さも不自由さも塩梅よくまじりあっているのが丁度よいと改めて感じている。そうでなければ、全ての人々が心地よく生きられない。今を受け入れ、人を大事にし、じっくりと考えながら日々の暮らしを大切にしていくことが求められていくような気がする。

その中に、忘れていた文化的な営みを再発見していけると思う。

近藤博子 (気まぐれ八百屋だんだん店主)

『TURN JOURNAL SUMMER 2020 – ISSUE 04』より(2020年5月29日)

イメージが形になった部分

(盲ろう者が)普段どういう形のものを好んでいるか。ワークショップで、みんなでフライドチキンの形をつくるだけでも、「こういうのがフライドチキンでしょ」っていう、それぞれが一番好きなフライドチキンの形が現れてくる。そういうのがすごく面白かった。

やっぱり形で見ている人たちじゃないと、ここまで具体的な指向性が出てこないのかもしれないなと思う。普段からアルミホイルのワークショップをやっているけれど、その中でもここではディテールが丁寧につくりこまれる感じがあって。ようやくみんなの中にあるイメージに触れられたかなと感じました。

富塚絵美(アーティスト)

第3回TURNラボ研究会より(2020年9月28日)

目の前の「未知」に出会う

探検と芸術は、似ているところがある。例えば、目の前の「未知」に出会って、体で突っ込んでいくところとか。

野口竜平(芸術探検家)

TURN LAND 気まぐれ八百屋だんだん「町にでるんば」より(2020年9月20日)

伝えたいんだなって感じる

何かを感じていても、それを具体的に他者に伝えられるってというのは、また別なこと。伝えようとしている相手に対して、何かを伝えたいんだなってことを感じる場所に、その人の存在価値があるんだと思う。それをどういうふうな形で伝えるか。見えるか、聴こえるかではなく、伝えたい気持ちがあるんだってということ。そこが伝われば、十分です。

日比野克彦 (TURN 監修者)

第11回TURNミーティングより (2020年9月19日)

ふわふわのアルパカの毛をひとつまみ

美術館にきた自閉症の一人の少年が私の用意したワークショップには見向きもせず、テーブルに置いてあったふわふわのアルパカの毛をひとつまみし、ふう〜っと天に向かって吹き上げた。高い天窓から差し光を浴びたその光景は神々しく、ああこういうことなんだなと理解した。少年はあの空間の「らしさ」を自然に引き出していた。美術館という場所の暗黙のルールに従うことでいつしか私が見失っていた感覚だった。彼らには、場所や人の「らしさ」を引き出す力がある。

五十嵐靖晃 (アーティスト)

『TURN on the EARTH わたしはちきゅうのこだま』より (2020年6月19日)

足りないものは、 持っている人が補えばいい

昨年のTURNフェス5に参加した時に感じた「ないものを意識するのではなく、持っている力を使う。足りないものは、持っている人が補えばいい」という思いを改めて感じている。その気づきをしっかりとココロと体に刻んでいきたい。

矢野聡子 (TURN サポーター)

第3回TURNサポーター勉強会 レポートより (2020年10月26日)

そんな自分でもOK!

どんな時も元気でいられなかったり、失敗しちゃったり、そんな時もあるかもしれないけど。

でも、そんな自分でもOK! コロナの影響で、まだまだ人と触れ合うことが難しいけど、自分のことをハグハグして大事にしようね。

マダム ボンジュール・ジャンジ (ドラッグクイーン / パフォーマー)

第11回TURNミーティングより (2020年9月19日)

著者プロフィール

ワーク事務局長 | 観劇に困難を感じる当事者が主体となって観劇支援を行う活動を展開。これまで、主にTURNフェスのアクセシビリティに関するコーディネートを担った。

上田假奈代 (うえだ・かなよ)

詩人/NPO法人こえとことばとこころの部屋 cocoroom 代表 | 2003年にココルームを立ち上げ、「表現と自律と仕事と社会」をテーマに活動する。大阪釜ヶ崎を拠点に、「釜ヶ崎芸術大学」や「まちかど保健室」などをひらき、2016年からゲストハウスも運営している。

アオキ裕キ (あおき・ゆうき)

ダンサー/振付家 | 「今を生きる身体から生まれる踊り」を求めて、2005年から路上生活経験者とともにダンスグループ「新人Hソケリッサ!」を開始。TURNフェス3・4に参加。

五十嵐靖晃 (いがらし・やすあき)

アーティスト | 人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。TURNに初年度から参加。「クラフト工房 La Mano」とともに、綿花を育て糸を紡ぐTURN LAND「手のプロジェクト」を行う。

磯野真穂 (いその・まほ)

人類学者 | 国際医療福祉大学准教授を経て独立。人類学の魅力をより多くの人に広めるために、働く人に向けたオンライン講座を開始。専門は医療人類学。

石川絵理 (いしかわ・えり)

NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネット

上野吉一 (うえの・よしかず)

名古屋市東山動植物園企画官 | 北海道大学大学院文学研究科修了、京都大学霊長類研究所付属人類進化モデル研究センター准教授を経て現職。専門は動物福祉学、動物園学、比較認知行動学。

大井妙子 (おおい・たえこ)

認定NPO法人ももの会理事長 | 学校の余裕教室を利用した高齢者を対象としたデイサービス事業「桃三ふれあいの家」、食堂があるコミュニティスペース「かがやき亭」を運営。2017年度よりアーティストの伊勢克也がTURN交流プログラムの一環で「桃三ふれあいの家」に通う。

大西健太郎 (おおに・けんたろう)

アーティスト/ダンサー | その場所・ひと・習慣の魅力と出会い「こころがおどる」ことを求めつづけるパフォーマー。TURNには初年度から参加。板橋区立小茂根福祉園とTURN LAND「こもね座」を展開している。

大政愛 (おおまさ・あい)

はじまりの美術館学芸員 | 「ひとと一緒に手を動かす時に生まれるコミュニケーション」に関心を持ち、病院でのアートプロジェクトや地域の展覧会企画に携わる。2016年より現職。

小澤いぶき (おざわ・いぶき)

児童精神科医 | 精神科医を経て、児童精神科医として複数の病院で勤務。トラウマ臨床、虐待臨床、発達障害臨床を専門として臨床に携わり、多数の自治体のアドバイザーを務める。

久保田翠 (くぼた・みどり)

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ代表理事 | 重度の障害のある長男の誕生を機に2000年に「クリエイティブサポートレッツ」を設立。アートをとおした社会包摂に取り組む。TURNフェス1・3に参加。

近藤博子 (こんどう・ひろこ)

気まぐれ八百屋だんだん店主 | 東京都大田区に有機野菜や自然食品を扱う「気まぐれ八百屋だんだん」を営み、全国に先駆けて「こども食堂」をはじめ。2017年度よりTURN LANDを展開。

砂連尾理 (じゃれお・おさむ)

ダンサー/振付家 | 京都・舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」、宮城・^{ゆりあげ}閑上の避難所生活者の取材が契機となった「猿とモルターレ」の出演、振付など、多岐にわたる活動を行う。立教大学現代心理学部映像身体学科・特任教授。

新澤克憲 (しんざわ・かつのり)

ハーモニー施設長 | 心の病を持ちながら暮らしている人が思い思いに過ごせる施設として「ハーモニー」を運営。2015年よりTURNに参加。2017年よりTURN LANDをスタートし、アーティストの深澤孝史やライラ・カセムらと企画を展開。

鈴木励滋 (すずき・れいじ)

生活介護事業所「カブカブ」所長/演劇ライター | 横浜市旭区の西ひかりが丘団地商店街で、障害のある人と地域の人が混ざり合う「喫茶カブカブ」と「工房カブカブ」を運営。演劇ライターとして、『ユリイカ』や『月刊ローソンチケット』などで執筆を行っている。

関場理生 (せきば・りお)

ダイアログ・イン・ザ・ダーク アテンド | 盲者であり、視覚以外の感覚との出会いを提供する活動に携わる。TURNフェス5のツアーアテンドや、TURNミーティングのアクセシビリティに関するアドバイスを行う。

高田紀子 (たかだ・のりこ)

板橋区立小茂根福祉園職員 | 生活介護サービスと就労継続支援B型サービスを行う通所施設「板橋区立小茂根福祉園」に勤める。施設は、2015年よりTURNに参加し、2017年からTURN LANDをアーティストの大西健太郎と宮田篤と展開している。

高島由美子 (たかしま・ゆみこ)

手話通訳士 | フリーランスの手話通訳士として、通訳や手話講師の活動に携わる。ろう者のパートナーとともに暮らして20年のパン

セクシュアル。2005年に、世田谷区の同性パートナーシップ宣誓書を提出し、受領書が交付されている。

高野賢二（たかの・けんじ）

クラフト工房 La Mano 施設長 | 町田市にある築100年以上の民家で、障害のある人とともにものづくりに励んでいる。初年度よりTURNに参加し、アーティストの五十嵐靖晃と交流を重ねた後、2017年度からはTURN LANDを展開している。

田中みゆき（たなか・みゆき）

キュレーター／プロデューサー | 「障害は世界を捉え直す視点」をテーマに展覧会やパフォーマンス、映画、ゲームなどカテゴリに捉われないプロジェクトを企画する。2020年度より、TURNラボに参加。

田村大（たむら・ひろし）

らくだスタジオ 映像演出家／脚本家 | 映像制作会社「らくだスタジオ」を共同設立後、多様な映画制作に携わる。TURN初年度より撮影し、現在TURNのドキュメンタリー映画を制作している。

トミザワタクヤ

Tokyo Cotton Village 代表 | 和綿栽培・手つむぎ指導活動を行うTokyo Cotton Village 代表。2020年度より、「クラフト工房 La Mano」で行っているTURN LANDにて、綿の栽培や糸の手紡ぎのアドバイザーを務める。

富塚絵美（とみづか・えみ）

アーティスト | 一般社団法人谷中のおかつ

てを設立し、ディレクターとしてアートプロジェクトを企画運営している。TURNに初年度から参加し、2020年度はアルミホイルを用いた盲ろう者とのワークショップを通して、異なる他者との協同の可能性を探る。

西尾美也（にしお・よしなり）

美術家 | 装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で実施。自身が勤める「奈良県立大学地域創造学部都市文化 commons」としてTURN フェス1に参加。

野口竜平（のぐち・たつぺい）

アーティスト／芸術探検家 | 移動行為によってゆらぐ制度や精神を「未知」として探検し、その刹那に生じる事態から芸術の起こりをさぐる。2019年度より、「気まぐれ八百屋だんだん」が展開するTURN LANDに携わる。

藤原辰史（ふじわら・たつし）

歴史学者 | 専門は農業史、食の思想史。京都大学人文科学研究所准教授。

マダム ボンジュール・ジャンジ

ドラッグクイーン / パフォーマー | あらゆる境界線を越えたキラキラした世界を願い、「YES! FUTURE」を謳い続ける。新宿二丁目にある「コミュニティセンター akta」元センター長。TURNフェスをはじめ、幅広くTURNのプログラムに参加。

マチーデフ

ラッパー | CMソングの作詞やテレビ番組のラップ監修を行うなど、ラップクリエイター

としても活動中。2019年よりTURNに参加し、「福祉ホームさくらんぼ」と交流を行う。

三科聡子（みしな・さとこ）

宮城教育大学教育学部准教授 | 全国盲ろう者協会設立前より、通訳・介助員として活動。視覚特別支援学校で20年以上教員を務める。TURNラボではアドバイザーを務める。

百木漠（ももき・ばく）

立命館大学専門研究員 | 専門は社会思想史。ハンナ・アーレントの政治思想を研究している。

森敦史（もり・あつし）

筑波技術大学総務課広報・情報化推進係 | 先天性盲ろう者として生まれ、3歳から難聴幼児通園施設に通所し、触手話や指文字を学ぶ。筑波技術大学大学院の情報アクセシビリティ専攻に通い、ICT活用に向けた支援の可能性について研究した。

モンキー高野（もんきー・たかの）

手話フレンズ代表 | 両親、妹ともに耳の聞こえないデフファミリーの家庭に育つ。2015年に手話の指導や教材制作、情報発信を行う「手話フレンズ」を創設。「ろう者の手話と、聴者の手話のズレ」など自身の経験をもとに、講演やワークショップを通して、手話の魅力やろう者の日常について伝えている。

矢野聡子（やの・あきこ）

TURNサポーター | TURNフェス5にサポーターとして参加。

ユキハシトモヒコ

旅する服屋さん メイドイン主宰 | 日本各地を巡り、その時その場所で出会った処でモノやコトをつくっている。2016年より活動拠点を大分県別府に移し、「文化をつくる」ための活動を行なっている。気まぐれ八百屋だんだんのTURN LANDにゲストとして参加。

日比野克彦（ひびの・かつひこ）

TURN監修者／アーティスト | 東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授、岐阜県美術館館長、日本サッカー協会理事・社会貢献委員会委員長。2015年度、芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）受賞。

TURNとは

SOCIALLY INCLUSIVE ART PRACTICE PROJECT

T U R N

障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトです。これまでに約80名のアーティスト、約60の施設や団体が参加しています。年間を通して展開している多彩なプログラムをもとに、国内外で広くその意義を発信しています。

監修：日比野克彦（アーティスト、東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授） | プロジェクト
ディレクター：森 司（アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長） | 主催：東京都、公益財団
法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人 Art's Embrace、国
立大学法人東京芸術大学

TURN 交流プログラム

アーティストと、福祉施設や社会的支援を必要とする人々が時間を重ねて交流し、共働活動するプログラム。また、社会や日常で意識化されていない課題への気づきを目的としたアーティストによるリサーチも行います。

TURN LAND

福祉施設や団体が、アーティストとともに参加型のプログラムを企画します。場所のもつ従来の機能に、市民が集まることができる地域にひらかれた文化施設としての役割が加わり、TURNを日常的に実践する場をつくります。

TURN フェス

TURN 交流プログラムやTURN LANDを実施する多様なアーティストや交流先の活動が一堂に集まるフェスティバル。作品展示やワークショップ、トークイベント、オリジナルプログラムなど様々なコンテンツを通してTURNを体感できます。

TURN ミーティング

TURNの可能性を共有し、語り、考えあう場。参加アーティストや交流先などの関係者とともに、各分野で活躍するスペシャルゲストを招き、様々な視点からTURNを考察します。

TURN ラボ

アーティストや各方面の専門家から見出されたりサーチテーマをもとに、様々な知覚の世界観や、多様な人との共生の方法などについて議論と考察を重ねます。

海外展開

国内外の文化芸術機関等と連携し、海外でもTURNを実施。参加アーティストが各国で伝統的な技術や所作を携えて福祉施設やコミュニティ等と交流し、その経験をもとに展示やワークショップまたはパフォーマンスを展開します。

[これまでの展開：TURN in HAVANA / TURN in TUCUMAN, BIENALSUR など]

TURN 2020

2月 第10回TURNミーティング開催

高齢者、障害者、日雇い労働者や旅行者など、さまざまな人たちが集う場と活動を事例に、「『違い』を面白がることで広がる価値観」や「多様性のある場」などについて思考を深めるトークを実施。

3月 TURN 交流プログラムとTURN LANDを一時休止

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、TURN 交流プログラムとTURN LAND を休止。

5月 TURN フェス2020中止を発表

7月から9月にかけて、東京都美術館をはじめとする複数会場で開催を予定していたTURN フェス 2020の中止を発表。

6月 交流の再開に向けた検討

TURN 交流プログラムとTURN LANDの活動に向けて、実施方法を検討。以降、各企画の特性にあわせて、順次始動。オンラインや文通など、遠隔で交流する形も取り入れる。

7月 TURN ラボ スタート

第1回研究会をオンラインで実施。以後、月に1回程度のペースでオンライン上で集う。

TURN ジャーナル タブロイド版第1号を発行

タブロイド仕様のTURN ジャーナル1号目を発行。日々変化する社会に応答することを視野に、年間を通して夏・秋・冬・春と定期的に制作。

「TURN on the EARTH ～わたしはちきゅうのこだま～」開催

世界6か国（アルゼンチン、ペルー、ブラジル、エクアドル、キューバ及びポーランド）でのTURNを紹介する展覧会（7月23日～9月6日）を、東京藝術大学大学美術館にて開催。海外で展開したTURNの参加アーティスト10組による作品を展示した。

9月 第11回TURNミーティング開催

初のオンライン開催。映像空間におけるアクセシビリティに取り組む。盲ろう者をゲストに迎え、さまざまなコミュニケーションの方法、知覚やイメージをキーワードに多彩な世界観を共有した。

11月 第12回TURNミーティング開催

「ろう文化」をキーワードに、表情や手話などを通して繰り広げられる対話の魅力について語り合う。

TURN NOTE

TURN NOTE「TURN」をめぐる言葉 2020

令和3年3月19日

監修: 森 司 (アーツカウンシル東京 TURN プロジェクトディレクター)

編集: 田村悠貴 (特定非営利活動法人 Art's Embrace)、

畑まりあ (アーツカウンシル東京)

編集協力: 特定非営利活動法人 Art's Embrace

[天羽絵莉子、岩中可南子、ライラ・カセム、玉置真、東濃匠十、
東濃誠、村方光沙子、山口麻里菜]、

アーツカウンシル東京 [荒木由香里、長谷川知広]

デザイン: 阿部原己

翻訳: オフィス宮崎

印刷: 渡辺印刷

発行: 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス8階

Tel: 03-6256-8435

Email: info@turn-project.com

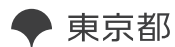
URL: www.artscouncil-tokyo.jp

TURN 公式ウェブサイト: <https://turn-project.com>

©2021 Arts Council Tokyo,

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

All rights reserved



文化でつながる。未来とつながる。

TokyoTokyo

FESTIVAL

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」とは、
オリンピック・パラリンピックが開催される東京を文化の面から盛り上げるため、
多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力を伝える取組です。

TURNはその一環として展開しています。